2011年(平成23)度　公開シンポジウム

葬儀の今を考える

～あなたはどう見送り、どう見送られますか～

発言者
イオンリテール株式会社イオンライフ事業部長
広　原　章　隆
龍谷大学客員教授・臨済宗神宮寺住職
高　橋　卓　志
龍谷大学教授・浄土真宗本願寺派大光寺住職
清　岡　隆　文
質問者
実践真宗学研究科２回生
佐々木　大　介
三ヶ本　義　唯
藤　田　圭　子
司　会
龍谷大学教授
深　川　宣　暢

〔司会者〕

本日の公開シンポジウムのテーマは「葬儀の今を考える～あなたはどう見送り、どう見送られますか～」です。このテーマについて、今回は、３名の先生方をお招きしております。最初に発言していただきますのは、広原章隆先生です。先生は、イオンリテール株式会社のイオンライフ事業部長の立場にある方です。先生は、1980年に、現在は大阪大学に統合されております大阪外国語大学を卒業され、卒業後すぐに、現在のイオンの前身でありますジャスコ株式会社にご入社であります。ジャスコ株式会社に入社されてからは、家電商品部長、茨城事業部長、ギフト事業開発部長を経て、2009年９月、一昨年からこのイオンリテール株式会社のイオンライフ事業部長、すなわち葬祭事業を立ち上げられました。その責任者であります。

次に高橋卓志先生にお話をお願いしています。先生は臨済宗の神宮寺のご住職でありまして、龍谷大学の客員教授も務めて下さっています。龍谷大学の文学部のご出身でございますが、国際障害者年を契機にボランティア活動に深く関わってこられた先生で、NPO法人「日本チェルノブイリ連帯基金」を鎌田實医師と共に立ち上げられた方でもあります。その後も命を取り巻く諸問題を一宗教者としての視点で捉え、様々な種類のNPO法人を立ち上げられています。また先生は『寺よ、変われ』という著書を出されていますが、その中にも「葬儀が変われば、お寺が変わる」という章を設けられて意見を発表されています。

そして最後に発言していただくのは清岡隆文先生です。先生は大学院実践真宗学研究科の教授であるとともに、大阪の浄土真宗の大光寺のご住職でもあり、本願寺派の布教使でもあります。全国を布教・伝道されながら様々な問題について明快にお答えになる先生で、今日も葬儀について先生のお考えをお話をして下さることだと存じます。

以上の３名の先生方の、ご発言から始めさせて頂きます。それではさっそくですが、広原先生からお話をお願いいたします。どうぞ宜しくお願いします。

〔広原〕

ご紹介頂きました、イオンの広原でございます。本日はお招き頂きまして、ありがとうございます。私の話が皆さん方にどれだけ役に立つか分かりませんけれども、まずイオンが一昨年から葬儀の事業を始めております、この事業がどのようなものか、のご紹介と、それからこの事業の関係で、菩提寺のない方が「お坊さんを紹介して欲しい」というお声をたくさんコールセンターに頂きました。こういった方達に対して、お坊さんの紹介も昨年からスタートをしました。この辺りの事と、そんな中で、一般のお客様からお坊さんに対していろんなご意見も頂戴致しておりますので、そのようなお客様の声を中心に、お話をさせて頂きたいと思います。

お話の前に、昨年５月ですが、イオンの事業としてお坊さんの紹介を始めまして、お布施の金額を目安という意味でホームページに出させて頂きました。これが、全日本仏教から「お布施の金額を明言するとは何事だ」とお叱りを頂戴しました。この辺りの背景もお話をさせて頂きたいと思います。

まず最初にイオンが葬祭事業を始めた理由でございます。元はと言えば、私ごとではありますが、父を９年前に亡くしまして、この時に、一般のビジネスをやっている私にとっては、この世界っていうのは非常に不明瞭だなと感じたところから、始まっております。いわば一般のビジネスでは考えられない、２～300万というお金が出るにも関わらず、見積もりもとらずにいきなりやってしまう。でも「高いかな？」と思いながら現金でポンと払ってしまう不思議な世界があって、車を買うくらいの値段が全く見積もりも無く、比較することも無く行われるこ

とに、非常に不思議な感じを受けました。それで私の会社の中に、以前からそういう不満を持った「不思議だ」と思った人間がたくさんいることに気づきまして、そのようなことから、明瞭で納得のゆく価格で、心のこもった葬儀ができる、そういうサービスがイオンにできないか、というところからこの事業が始まっております。

そこでイオンの葬儀費用として、199万という表示をしました。日本の葬儀費用については、少しデータは古いかも知れませんけれども、日本消費者協会が出している、日本の葬儀の平均価格は、アメリカ、韓国等の国情から考えると、非常に割高であるということは間違いないと思います。

ところで「お葬式ってなんの為にあるのか？」ということについては、これも色んな議論があるんですけれども、イオンとして大切にしているお葬式の意義については２つあります。

まず１点目は、亡くなった方にとって、仏教でいう浄土の世界にお送りする儀式、これは当然のことです。また、大切な方を亡くされたご遺族にとって、その死を乗り越えて、明日から一歩一歩新しい人生を踏み出していただくというきっかけにする為の儀式であるということです。２点目は「命のつながり」を感じて頂いて、参列された方、またご遺族の方の命を大切にして頂く為の儀式でもあると考えております。皆様方にとっては、釈迦に説法でございますけれども、私どもはお客様に対して、命がつながっている事、この事を葬儀の中で説明をさせて頂いてます。自分の両親がいる、そのまた両親がいる、これをずっとつなげて行くと、25代遡ると3355万4432人の先祖がいるという計算になります。このうちのたった一人でも、もし疫病で倒れたり、また戦争で亡くなったりということがおこっていたなら、ここにいらっしゃる皆さん方の存在は無いという事になります。その奇跡的な「自分」という存在、この「有難い」、この存在自身が「有るが難し」という事だと思います。そこで、お葬式では亡くなった方、おばあちゃんが亡くなったら、この方がいらっしゃってこそ、お孫さんが今ここに存在されている、といった事をお子さん達にも是非伝えていきたいと思っております。ただこれは一業者である我々がお客様に伝えても、なんの重みもありません。ぜひ、宗教者の方にこういった事をお伝え頂きたいというお願いをしております。

さて、イオンのお葬式には３つの特徴がございまして、一つ目はその品質でございます。これは当たり前の事をやっておりますので、普通の事業から考えると何ら特別な事をやっておるわけではないです。まずは、イオンの基本理念である「お客様第一主義」。これは会社全体の考え方ですが、それに基づいてお客様の視点で、品質基準を作り上げたという事です。お客様の視点とはどういう事かといいますと、一般人である我々が、自分の親を送る時に、「こういう事は絶対にしてほしい」という事は全部やろう、「こういう事は絶対にしてほしくない」という事は絶対にやらないと、この二つの基準で140項目を決めています。その厳しい研修を葬

儀社さんに参加していただいて、これをクリアーした全国467社の地域で非常に優秀な「プロ中のプロ」といった葬儀社が最終的な葬儀事業を行うという事をやっております。

二つ目の特徴は、もちろん価格面でございます。明瞭で納得のいく価格基準。当然我々も利益無しではやっていけませんので、当然利益を頂くわけですけれども、業界慣習に囚われることなく、例えばショッピングセンターで、商品を販売するかのように、一品、一品に価格を明確につけております。これをやった時に、葬祭事業を長くされている方から苦情も頂きました。「あんたそんな非常識な」と。葬儀をやる業者というのは24時間体制で働いてるので、これはセットでいくらっていうお金を貰わないと合わないという事も言われました。しかし、イオンの常識でいうと、一つ一つの商品に値段をつけるというのは当たり前で、セットで販売するのは正月の初売りの福袋くらいのもので、それも最近は福袋も、透明な袋であるとか、中身を明示しないと中々買っていただけないという時代ですので、一品、一品、棺はいくら、祭壇はいくら、そういう事を全て明示をさせて頂いています。また、お客様が必要でないと仰ったら、その部分を削除する事もできるという事をやっております。

同じ品質であれば、イオンが何故安くできるかという事でございますけれども、一つは、葬儀社というのは非常に広告宣伝費がかかります。病院に入るにも、お金がかかります。こういった営業費用無しで、1700万人のイオンカードのお客様、従業員だけでも35万人おりますので、こういった紹介ができるという事で、営業経費はかけなくてすむというメリットがあります。それからもう一つは、葬儀社というのはホールは50％稼働していれば大体、平均的と言われております。半分は空いているわけですね。空けておいても収入はゼロというところに我々の葬儀を紹介すれば、半額でも、ゼロよりいいんじゃないかという発想で特約店の葬儀社は受けて頂いております。だから、安くても同じ事ができるという事でございます。

もう一つは棺や蝋燭、線香のような当たり前に必要なものを、イオンがまとめて仕入れる事によって仕入れの価格を安くすることができます。こういう事で、葬儀社さんの利益の中から我々が搾取するという事ではなくて、かかるコストそのものを安くできる仕組みに構造を変えて行くということであります。いわば、イオンが顧客を斡旋することによって、またイオンが仕入れを集約する事によって葬儀社にかかっているコストを削減し、ひいては葬儀の料金を引き下げる事になるという構造であります。

特徴の３つ目は、イオンカードが使えるという事です。この点については、本日の話とは少し内容がずれますので割愛いたします。

それからいま一つは、イオンのお葬式の特徴というのは、世界に一つだけの、オリジナルの会葬礼状というのを行っているということです。ご遺族に、故人様の人となりであるとか、ご遺族の気持ちを専門のライターが、３分から５分の取材をさせて頂いて、ご遺族に代わって作

成をいたします。あくまでもその人らしさを大切にするという事が、イオンの葬儀であるという事です。いわば一般的な礼状ではなくて、その人その人に合った、世界に一つしかない文章を作らせて頂いています。このことは会葬の会場におきましても、故人を知ってもらうための、パネルをご用意させて頂いています。といいますのも、会葬に私自身もよく参列をするのですが、会場にいくと、自分の同僚のお父さんが亡くなったというような場合、同僚の事はよく知っているのでが、お父さんはどんな方か全く知らずに焼香だけする状況になっています。前の方が何回やったかな、というのを見ながら、あんまり気持ちのこもらない焼香をしてしまう。これが本当に葬儀と言えるのだろうか、という事を考えますと、やはり、参列した方が、故人をみなさんで偲んで頂く、どんな方だったかという事を紹介をする必要があるという事で、故人を紹介するためのパネルを作らせて頂いてます。しかし最近、急速なスピードで、首都圏を中心に都市部で直葬というのが急増しています。葬儀をせずに直接火葬場へということであります。これも仏教離れの一つの現れかなと思います。自分一人で生きてきた訳はないのですから、色んな人のご縁に支えられて、生きてこられた、例えばお父さんの人生、これを葬儀をやる側のご遺族の方が、独断で誰にもお断りせずに、知らせないというのはどうかなと、私は思っております。

昨年の５月にイオンが寺院紹介を始めた理由ですが、これも、お客様の要望が非常に多くございました。菩提寺を持たない人、30年前に田舎から東京へ出てきて、そのまま年をとって亡くなっていかれるのですが、都会ではお坊さんとの付き合いがないと仰るお客様が非常に多いです。決して檀信徒と菩提寺の関係に介入するということではなくて、本当にお困りの方をどうしていくかということを考えた末、お坊さんを紹介するということを始めました。もちろんこれについては一切の収益を得ておりません。もしお坊さんを紹介しなくて、無宗教で葬儀をやるとなると、指揮者無しということになり、それこそ直葬がますます増えていくということを非常に危惧をしております。

HPにお布施の金額、目安を載せました。これも、お問い合わせが非常に多いんです。お坊さんは「お気持ちで」と仰いますが、どれぐらいのお金を出したらその気持ちが表現できるんだろうか、というお客様が非常に多くございました。私どもと提携頂いたお寺の方から大体これくらいで全てできます、という目安を明示して頂いて、それをホームページに掲載させて頂きました。ところが、全日本仏教会から「営利企業がお布施にまで言及して、目安と言いながら料金体系化していいのか。宗教介入である。」というご指摘を頂きました。また「お布施は寺と檀家の長い付き合いの中で決まっていくもの」ということで、「営利企業が扱う筋ではない」ということも言われました。しかし我々の方は、お布施は目安として出さないとお客様からのお問い合わせが非常に多いもので、目安として出したということだったのですが、これ

が理解されずにいろいろなご批判を言われました。いまは全日本仏教会とも非常に友好的な関係になっております。ただし、イオンが反省すべき点は、我々がお布施の目安と言いながら表示をするということが、あたかも仏教界全体の相場であると見られるかもしれない、という誤解を招く恐れがあるという点です。ですから今はホームページから削除して、一人一人のお客様に、地域性、宗派のこともありますというお伝えをしています。コールセンターには、特に、お布施の額に対する苦情は非常に多いです。「お布施が少ない」と言って、明らかに横柄な態度になったお坊さん、上から目線の態度に対する苦情。「なんとか大学を出たくせにお前は靴も揃えられないのか」ということを一般の方に仰るお坊さん。お勤めの途中で携帯を二度も鳴らすとか、さらにBMWを乗り回すお坊さんに対する不満等々。別にお坊さんがBMWに乗られることに関しては、私は何も問題はないと思うんですけれども、お客様の中にはそうは思われない方もおられるということです。そして、いろんな苦情を本山に申し出たという事例もございます。一昨年、お父様が亡くなった時に息子さんが失業状態で、20万円しかお布施は出せないので、申し訳ないけれどもこれでやっていただけないか、ということをお坊さんに申し出たところ、「それはあなたの事情でしょ。寺とは関係ない、良識のある金額を出しなさい。」と迫って、やむなくこのお客様はお金を借りてきて調達せざるを得なかったということです。このことにご立腹になった宗家の方が、本山にお申し出になったんですが、本山は特に何もできないということで、私どもに対して「檀家を辞めたいんだけれども、どうすればいいか。」というご相談があった、というような事例です。それから、今は年収200万円台という方も非常に増えている時代です。こういった方は平均的に50万円くらいと言われておりますお布施が払えないという現実もあるということです。また、九州が実家で、代々菩提寺もあるんですけれども、東京へ出てきて30年、同じ宗派の東京の寺院を紹介して欲しいということを菩提寺に申し出た所、断られたというような方もいらっしゃいました。一方で、非常にお坊さんに感謝をするという言葉もたくさん頂いております。

次に、本心から「お気持ちで」と仰るお坊さんについてです。家庭の事情でお金がなくて、５万円でできないかという相談がイオンにあって、それでご紹介して、ご住職に５万円でお願いし、やって頂いたんです。快くお勤めして頂いて、法話も本当に心温まるお話をされて、このお客さんが感動されたということでございます。後日、預金を相続して100万円をお坊さんにぜひ差し上げたいということを申し出られて、お坊さんにお伝えしたところ、イオンの基準である、目安の25万円でいいということになったのです。こういうお坊さんもいらっしゃるということでございます。お寺に対して、私どももいろんな意見をいただくということでございます。お寺様はいつも気持で結構ですよ、と仰るのですが、この気持が大体いくらか、ということがよくわからないので、やはり大体いくらくらいと、と言わざるをえないのです。檀家の

場合は、問題ないんですけれども、そうでない方が増えているということでありまして、また、本当にお気持ちでと差し出したら、「これではできない」ということで返されるという事例もあります。こういった場合に、お気持ちで、というのはそれはそれでいいと思うんですけれども、やはり、お金を出したくなるようなお坊さんであってほしい、地域で愛される、尊敬されるお坊さんであれば、先程の事例のように、お金はいくら出してもいいという方もいらっしゃるんではないかと思っています。

この2011年３月11日の東日本大震災、この時から少し、日本人の心が変わってきたように思います。互助の精神、それから繋がりの大切さ、こう言ったことが見直されつつあるのではないでしょうか。また、グリーフサポートに対する意識の高まり、こういったものも、この震災を機に変わってきたように思います。今こそ、葬儀の流れを変えなければいけない、と思っております。だんだん小規模化してくる葬儀の中で、時代の流れにできるだけ合わせていくということも大切だと思いますけれども、いくら小規模になっても、心のある葬儀、意味のある葬儀、これをやっていかなければいけないと思います。お布施の金額を明示するしないといった議論をするよりも、いま仏教界から関係団体、企業、我々の企業も含めて、力を合わせて、心の拠り所としてのお寺離れ、宗教離れといったことを食い止めなければならないと思います。私どもは、できるだけそういうことに協力ができるように今後も頑張っていきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

〔司会〕

広原先生ありがとうございました。葬儀というのは、宗教的な営みと関わるということはもちろんですが、間違いなく具体的に経済的な営みでもあります。今お話にありましたように、イオンリテールさんのイオンカード会員様は1700万人と仰いましたが、おそらくもっと増えてるんでしょう。日に日に増えるカード会員さんが相手でありまして、決して小さな数字ではありませんね。そのイオンさんが葬儀事業を立ち上げられたということは、やっぱりいろんな課題や問題を抱えながら、やっておられることはよく分かりました。私どもも少し、宗教者側からも考えるべきこともたくさんあるんじゃないか、と感じられますが、またご質問がありましたら、どうぞお願いしたいと思います。

さて続きまして、今度は高橋卓志先生にご発言を頂きます。先生は先程紹介しましたように、臨済宗の神宮寺のご住職でもありますが、ご自身がすでにいろんな形で葬儀を実践されておられます。葬儀というのはどうあるべきなのか、どのように実際行われているのか、ということを含めてお話を頂きたいと思います。

〔高橋〕

神宮寺の住職であり、龍谷大学の社会学部の客員教授をしております。また実践真宗学でも、いま講義でお世話になっております。私は、ずっと自分の寺で葬儀に関わること、それからもう一つはその葬儀に関わっていく中で、今回、3.11が起きたということでどのように葬儀が変わっていくのか、についてかなり注目しながら、検証していきたいと思っておりました。そして、その検証結果から、葬儀が変わるというだけでなく、大きく日本人の死生観が変わってくるという状況にぶちあたりました。私は３月11日に自坊で揺れを感じ、その翌々日の３月13日に南相馬に入りました。南相馬は原発30km圏内であります。実は私は1991年から６年間チェルノブイリを36回往復しております。チェルノブイリ事故後の高度汚染地域に入り込み、そこで子供達の晩発障害（放射線による後遺症）についての治療、それから救援のプログラムをずっと運営してまいりました。その関係上、原発事故でしかも重大化することを予測し即入った訳であります。それと同時に、地震直後の映像を見た時、これは間違いなく大量死が起こると直感しました。未曽有の大量死が起こるという時に、私たち宗教者は何をしたらいいのか、そのことが大変気になりました。その２点を考えながら、まずは入ろうということで南相馬に入ったわけです。３月13日の南相馬の鹿島の海岸沿いは、２ｍも３ｍも瓦礫が重なり、船が打ち上げられ、その打ちあげられている船の脇、あるいは瓦礫の中に亡くなった方々が挟まっている状況でした。そしてそこではたくさんの人たち、被災者であるんですが、被災者自身が、自分の肉親を探していました。瓦礫を片付けて遺体を引き出していく。そういう作業の現場に出会いました。その後、私は被災者の支援をするために南相馬に留まり、チェルノブイリで一緒に支援活動をした鎌田實さんが所属する長野県茅野市の諏訪中央病院の医療のチームが入ってくるための準備をしていた訳であります。そんな中、鹿島の避難所で一人の男性に出会いました。３月24日のことです。50代のEさんは、ずっと避難所に出入りしている私を見つけて近寄ってきて「高橋さん、あんたお坊さんだってね。」と聞くんですね。「そうです」って言ったら、「頼みがあんだけど」って言うんですね。「なあに」と聞いたら「父親が津波で死んだ」と。そして津波後３日目に遺体が見つかったのだが、遺体が今、南相馬農業高校の体育館にあると言うんです。この南相馬農業高校の体育館というのが、遺体の安置所になっていて100体から120体のご遺体が安置されておりました。火葬場が地震で壊れ、火葬ができないためずっとそこに安置されているわけです。そこに私は入った日からずっと毎朝一体一体に、お経をあげるということを日課にしておりました。その遺体の安置所にEさんのお父さんもいらっしゃるということを聞いたんです。そして彼はこう言うんです。「今まで僕は眠れなかったんだけれども、やっと火葬の日程が明日、25日になった。なんとかこれで眠れるようになりそうだ。」と。そこでEさんは「高橋さんはお坊さんだから、申し訳ないけどお経をあげてくれないか。」と

言ったのです。「いいですよ」と約束し25日の朝に行きました。Eさんはたった一人でやって来ました。「ご家族は？」って聞くと、「親父は死んでここにいる。母と私の妻は津波に流されたまま、まだ見つからない」と言うんです。だから、たった一人で来たわけです。体育館の中に祭壇はありません。お花も位牌も遺影もありませんでした。そんな中で、私はEさんのお父さんの棺の前でお経をあげました。傍らにはEさんが独り立ち、お経を聞いてくれていました。そしていよいよ行政が用意してくれたライトバンにそのご遺体を積み込むという事になりました。そのときです。体育館の入り口にいた10人ほどの警察官が近寄ってきました。警察官たちは棺の両側に整列し、その御遺体に深々と頭を下げ、合掌し、そしてそのご遺体を壊れ物を扱うように大切に持ちあげ、ライトバンまで運んでくれたのです。そして、ライトバンに乗せてくれて、２列に縦列に並び、車が出て行く瞬間再び深く敬礼をしたのです。これを見たときに大きな驚きと感動が湧き上がってきました。すごいなと思いました。お葬式の原型がここにあると思いました。その警察官たちはどういう人たちかというと、ずっとそれまで遺体の捜索、生存者の救出、検死、死の認定という仕事に関わってきた人たちです。その人たちだからこそ、亡くなった人に対する思いが深かったのだと思います。死者との距離の問題なのです。被災者、亡くなった人々とその場にいた警察官の距離はとても近かったのだと思います。そんな中で行われた警察官の方々の気品の高い行為と態度は見事だと思いました。そのシーンが、今回、お葬式を考えていく上で、私の原風景と重なってきた、という気がいたします。

もう一つ申し上げます。その後も色々な事がありましたけれども、４月に入って私は南相馬から石巻に移りました。石巻には大きなジャスコがあるのですが、そこは近郊で一番最初に店を開けてくれたお店でした。物資が不足している時にイオンさんが店を開けてくれたんです。だからイオンさんには悪い印象は全く持ってないし、先ほど広原さんがお話下さった中で、「葬儀もお寺も変わらなければ」という趣旨でお話されたのですけれども、うなずける事ばかりです。「変わらねばならない」ことを私は『寺よ、変われ』という岩波新書のなかに詳しく書きました。では、この度の震災で何が変わってきたのかと言うことを申し上げます。

まず大きく変わったのは「エンディングノート」を書く人が増えてきたと言う事。なぜかというと、震災により死が身近になったから。つまり津波にのみ込まれ、突然、死に至る可能性があることを実感したり、直接津波には遭わなかったけれど、200万人を超える帰宅困難者の一人になったことで、死の恐怖が現実化したことが原因だと思われます。だからその時のために、リビングウイルとして残そうとエンディングノートが注目されたのだと思います。そして、それにしっかりと書き込むようになってきたのだと思います。

それからもう一つは、お葬式が明らかに変わってきていると感じます。近年、お葬式は縮小化しているのは事実ですけれども、その縮小化がより加速しているということです。そして一

人ひとりが亡くなった人に相対して、しっかりと見送るという、例えば「家族葬」などにシフト変化を起こしている。そのように明らかに葬儀が変わっていく中で、今まで神宮寺がやってきたことを皆さんにお話したいと思います。皆様この本をご存知でしょうか。一つは島田裕巳さんが出された『葬式は、要らない』です。もう一つが私の『寺よ、変われ』です。この2つを比べると良く分かるんですが、葬式に関して私は島田さんよりキツイことを書いています。その中で、お葬式にお金がかかるという事実の認識があり、そして現行のお葬式というものは金額に見合ったものではない、ということも明示してあります。それから葬式の内容や執行する儀式の意図が不明であることについて、坊さんたちはその説明責任を果たしていないということ。それから戒名について。この「戒」については浄土真宗の方々は違った意識を持たれていると思いますが、禅宗の場合、お坊さん自体の「戒」が確立していないのに戒名を与えるということ自体が根本的におかしいのではないかということ。もう一つは、現代は葬儀社の主導によってお葬式が行われているわけなのですが、その葬儀ホールというところに鞄をもってお坊さんたちが行き、一時間程度のお経をあげて、それで終わり、というような状態。つまり、お坊さんは、何をするかといえばお経の読み屋でしかないということ。私は島田さんとの間で、3.11前に葬式は「要る」「要らない」という議論を誌上で戦わせてきました。ところが、3.11が起こった瞬間、葬式が「要る」か「要らない」かという議論はすっ飛んだのです。すっ飛んだ上に、先ほどのEさんの葬儀の時に警察官の方の見送りを見たのです。もう、葬式は「要る」か「要らない」なんていうくだらない議論はやめた方がいいのじゃないか、と思うようになりました。島田さんは震災前の昨年の９月、私の友人でもある大阪の應典院の秋田光彦さんのお寺で講演されています。そこでは仏教界を揺るがす最近の三大事件というものを取り上げています。まず最初に「千の風になって」の流行、次は島田さんの自著『葬式はいらない』の大ヒット、そして流通大手イオンの葬祭業進出です。そして島田さんは「これらは単純なものではなく、また一過性のものでもなく、本質的な社会の変化を表している」と言っています。これは島田裕巳さん自身の言葉です。この「千の風になって」というのはお墓の存在意義とか、先祖供養の無化という理論に繋がっていき、『葬式は要らない』が大ヒットしたことについては、その原因は、高額な葬儀費用の負担、それから、遺骨の管理やお墓の継承という問題に関してであり、さらには老後の不安と死後の経済的不安があるにも関わらず、葬儀にそれだけのお金を使わなきゃいけない、これはおかしいということです。さらに仏教と言うのは「苦」を救うためのシステムを持っているのにそれが稼働していない、ということを島田さんは言っています。

そしてイオンさんの葬祭業の進出に関してですが、これは葬式仏教が抱える問題の裏返しだと言っているのです。今、葬式仏教がこういう体たらくだから、その裏返しとして、イオンさ

んが出現したんだと言っているわけです。また、現行の葬式仏教の中で支持されてない部分を、イオンさんが入ることによって解決が図られているとも言っています。先ほど広原さんがおっしゃった金銭の透明化、喪主の納得を得ること、そして新しい感覚の自由な葬儀の執行。これがイオンさんが入る事によって可能になるんだという事です。加えてそれで戒名料やお布施の目安という言葉は使わないとおっしゃいましたね。これは全日本仏教界からのクレームによって使わなくなったんですけれども、実は一般の人々の情報収集能力はすごくて、一度ホームページに載っただけで、値段を知ってしまっているんです。そんな状況で全日仏がクレームをつけても遅いと私は思います。ただ、彼が言っている３つの点っていうのは実をいうと、表層的な問題でしかないと私は思っています。では何が根本的な問題かといえば、これらの変化を感じているのは誰かということであります。その変化を感じている人たちの存在とは、団塊世代であります。私は1948年の生まれですから、団塊世代のど真ん中です。今、私の世代の仲間は700万人います。この700万人が、これから2040年頃までの間に全員が死んでいきます。700万人の死です。つまりそれだけのマーケットがそこにできるわけです。そのマーケットができることに、流通大手が気づかない訳が無い、そう思います。そしてイオンさんのやり方は、企業として当然のことをしたまでだと思っています。皆さんのお手元にお渡しした、かなり分厚い資料があるのですけれども、これは私の「寺」でおこなっている葬儀のやり方を説明したものです。そしてその中の資料で、仏教タイムス社に１月１日に私が寄稿したものをご覧ください。メインタイトルがなんと「イオン葬儀の波紋」となっていて、「お布施は明示すべきか」という議論をしています。「明示すべきだ」という私の意見と、「明示すべきでない」という他の方の意見が見開きの両方に載っているわけです。お布施の明示ということに関して言えば、これは、お寺の足元を明らかにすることができるかどうか、そして、今までブラックボックスの中にあった寺の経理をきちんと出せるかどうか、そこが問題になってくるのだと思います。私は、今、大学の社会学部で「市民活動論」を教えています。「市民活動論」というのは非営利組織（NPO）の経営論であります。公益法人である宗教法人のお寺も非営利組織でありますから、その経営論でもあるわけです。そんな中でNPO法人にどうしても必要になってくるのが、経理の明確化、それから説明責任であります。ここら辺がお寺は決定的に欠けています。皆様のお手元にはお配りした色んな資料がありますが、その中に神宮寺が2010年の１年間で行った葬儀の一覧が出ています。お布施の額まで全部入っています。その他には、イオン葬儀見積もりのシミュレーションと、神宮寺葬儀の比較というのがありまして、金額の比較になっています。イオンさんが39万8000円の葬儀をやった場合に、私の所ではそれと同じもの、あるいはそれ以上の質のもので５万4150円でできるという比較表です。これは本当の話であります。神宮寺の葬儀には基本的に葬儀屋さんは入りません。葬儀を営利と考えないから安価で

できるのです。このあたりを読んで頂くと面白いと思います。

レジュメにある「４％と84％この違いはどこから来る？」ということですが、これだけでは意味が分からないと思います。この間（2011年２月）禅文化研究所が主催して、臨済宗黄檗宗合同の住職研修会を行いました。そこに私が呼ばれて葬儀について話をしてきたのです。研修会には事前アンケートがあり、200人くらいのお坊さんにアンケート調査をしていたのです。その中に、「あなたたちはお葬式をどこでやっていますか？」という設問がありました。そしたらほとんどが葬儀社のホールを使ってると回答していて、寺での葬儀はなんと４％しかありませんでした。それから、84％という数字は、神宮寺を使って葬儀をする神宮寺の檀信徒さんの葬儀の際の神宮寺使用率です。それが84％。この違いはいったいどこから来るのかということですが、それは神宮寺が努力をしているからです。以前から檀信徒が無駄な出費をしないで、大切な人を精一杯見送れる環境を作るため、細かい努力を重ねているのです。そういったものが実はこの中84％の中に現れているということです。それから先ほど広原さんが故人の思いをしっかりと伝えてゆくために、世界に一つだけの会葬礼状を作ると言われましたが、神宮寺では世界に一つだけのお葬式をやっているという自負があります。一人ひとりお葬式が全部違うのです。100人いれば100人の生き方があり、100人の別れ方があります。だからその一人ひとりが、どういう人生を生きたかということを、映像を使い、音楽を使ったりしながら進めていきます。もちろんお経も読みますし、禅宗には不可欠な「授戒」という戒名を授ける儀式と「引導」は外しません。その仏教儀式を終えた後、「お別れ会」としてたくさんのお越しになっている方々、あるいはご家族の方々に、この亡くなった方はどういう人生を歩んできたのかと言うことを、語り、見ていただくという方法を採っています。それからイオンさんも24時間体制と言われましたけれども、神宮寺も24時間体制で対応しています。真夜中に電話が来ることはよくあります。そして、資料の『あなたが旅立つ日のために』（神宮寺葬儀のパンフレット）の中にある葬儀のスケジュールをご覧ください。この中に「大事な事」として３つ注記してあります。それはまず事前相談であります。調子が悪くなったら、あるいは何か思うことがあったら、お寺に相談してくださいということです。葬儀は事前相談からスタートします。それから次に大事なことは、「亡くなったらすぐに電話をかける場所はお寺だよ」と檀信徒に伝えていることです。葬儀屋さんじゃないよって言っています。葬儀屋さんの入口に入ってしまうと出口が変わってくるんです。金銭的に大きく変わってくるのです。だから電話をお寺にかけなさいと言ってるのです。そんなことを常に檀信徒に申し上げています。お寺というのは、公益的な立場で、「教え」をたくさんの人に広めるという役割があるのですけれども、その中で営利を獲得する必要はありません。その意識があれば原価で葬儀ができます。その工夫がこの資料の中にあります。

最後に一つだけ申し上げます。私はお葬式というものだけを切り取って考えていません。生老病死という人間の人生の中で、生きるときの悩み、それから年老いたときの悩み、苦しみもあります。そして病気の苦しみもあります。生老病死にからまってくる「苦」がお寺にくれば解決ができるというシステムを作ろうとして必死でした。その中で、高齢者の介護の施設を運営したり、病院との提携をして、在宅の緩和ケアをやったりということを、地元の地域で動かしています。このような活動を、たくさんの人たちが信頼をしてくれています。そしてすべての人に訪れる死、その葬儀は、お金をかければいいというものではありません。大切な人を見送る人々が納得できる方法を、寺が中心になって考え、工夫していくことが大事だと思います。

たとえば祭壇について申します。神宮寺の祭壇料は20万円です。20万円という祭壇は親戚あるいは子供一同、孫一同という、普通だったら生花を出していく人たちによって作られます。生花の場合、普通は何の何某という名前をつけて出します。それが松本地方だと一基１万５千円から２万円です。それをお金で喪家に渡しましょう、という形にしてるのです。喪主さんはそれをいただいて遺族みんなで、あるいはお花代を出してくださったみんなで祭壇をつくっていくという方法です。たとえば10名の方が生花ではなく供花料（お花代）として喪家に渡すと、喪家の祭壇料負担はほとんどなくなります。あるいはプラスになってしまう場合もあります。これが「供花料含み生花祭壇」といわれるものです。これは、葬儀屋さんは絶対やりません。祭壇で儲け、生花で儲けるわけですから。神宮寺はそのように儲ける必要はないので、このやり方をみなさんに伝えています。100％といっていいでしょう、ほとんどの方々がこの方式の祭壇を選びます。これが寺ができるひとつの工夫であります。

他にもいろんなものがありますが、特にお坊さんのなかで、これからの葬儀を見たい、考えたいという方がありましたら、神宮寺はインターンシップ制をとっていますのでお出かけください。２ヶ月でも３ヶ月でもお預かりします。以上で私のプレゼンを終わります。ありがとうございました。

〔司会〕

ありがとうございました。具体的なお話を交えて、イオンの広原さんを前にして、葬儀社抜きの葬儀がよろしいというようなご提言でありましたので、どうなることかと思いましたけれど、また後ほど補足をしていただきましょう。

さて、次いでは、龍谷大学の私どもの教授をしてくださっております、清岡隆文先生のお話をお聞きします。葬儀というのは当然のことながら、教義が違いますと、あるいは信仰が違いますと、その有様も変わってきます。目に見えるところだけではなくして、様々な心の動きを含めて、変わってくるところも多いかと思いますが、そんなことをたくさん経験しておられる

浄土真宗の立場から、今までどういう葬儀が行われてきたのか、また現今どんなことが、問題となっているのか、というお話を頂戴したいと思います。清岡先生、どうぞよろしくお願いします。

〔清岡〕

失礼致します。ただいまコーディネーターの深川先生からご紹介いただきました清岡です。３年前に龍谷大学大学院実践真宗学研究科が開設されまして、そのときから実践真宗学研究科に関わらせていただいております。それまでは、住職として、あるいは布教使として、色々な伝道の現場に出させていただいておりました。ここにも僧侶の方、これから僧侶になろうとする方々がたくさんいらっしゃると思いますが、私は昭和43年に住職を拝命致しましてから、今現在も住職ですから、だいたい43年ぐらいになろうかと思います。ここには、それ以上の方もいらっしゃるかとは思いますが、概して長いほうではないかなと思っています。そんなことで、年数だけは経験しておりますので、そのような中で感ずることをお話申し上げたいと思っています。

まず１番目の問題ですが、現代における変化のテンポの速さが、葬儀においても顕著に見られ、それも大都会から地方への方向で画一化しながら広がっています。今私の住職歴を簡単に申し上げましたが、住職になってから10年あるいは20年は、そんなに足早に変わらなかったんです。ゆったりとしたテンポで、どこがどう変わったかと、あまり特徴的に言えないほど、ゆったりと変わりつつあったのですが、この10年来の変化は、とても目まぐるしいというか、激しいものがあります。これは何に由来するのかと、思いつくままに申しますと、まず、核家族化です。それから、超高齢社会になったということです。そして情報化の時代になったということです。パソコン、インターネット、携帯電話の時代です。そして、今申し上げたこととも関連しますが、もっと基本的には、血縁関係が薄まってきているということです。要するに、親子の結束は強いですが、もう従兄弟姉妹とか、あるいは、おじとかおばとなると、あまり日頃の付き合いがない。こういう傾向が、いま出てきているように思います。そこへもってきて、地縁社会が崩壊をしてきています。大都会から地方への影響というものが当然あるわけでして、そういうことが絡み合って、葬儀においても、激しい変化が、ここに至って見られるようになってきたのではないかと、このように考えております。

ところで、いままでのお葬式というものを考えたときに、私は蓮如上人の、常にこのような場で拝読される『御文章』の「白骨の章」を思い出すわけであります。いまでも全国の浄土真宗のお寺の方々は、葬儀の流れのなかで「白骨の章」を拝読されていると思いますが、これも今の時代、かなり違和感が出てきているのではないかと考えています。でもこの「白骨の

章」が与え続けてきた大きな教化力というか、影響力というのは、無視はできないと思います。「白骨の章」に表れる、文字と文字との間から浮かびあがってくるものがあるというのは、やはり地域における濃厚な人間関係があったという背景であります。まさに野辺の送りをして、遺体が村はずれの焼き場で焼かれるとき、その遺体を焼く煙がその村を覆うなかで、その夜はどの家も賑やかに楽しんだりしないで、同じ村の人が死んだということで、みんなが、その夜は亡き方を想って静かに一夜を明かしたと考えられるわけであります。ですから、そういう状態がいまはもう、無くなってきたというようなことであります。

先ほど来、イオンの広原さん、ただいまの高橋先生が仰ったように、家族葬、直葬というのも、そういう流れのなかで考えなければならないと思います。しかしながら私の、あまり大きな寺ではないのでさほど年間を通じてのお葬式の数はありませんが、今年に入ってお葬式に関わらせていただきました中の、約２割は家族葬でした。家族葬というのは、だいたい多くて十数人です。極端な場合には十人以下です。ですから、当然のことながら、親戚だって呼ばないのです。本当に、亡くなった人の兄弟姉妹と、あるいは配偶者と、子供というぐらいの、ごく少数の人数で、お葬式が行われるのです。直葬はいうまでもないことですけれども、家族葬でも基本的に宗教心があまり感じられない気がいたします。一応私は招かれて行くのですけれども、この方々の中から、お念仏の声が流れ出るということは、なかなか無いんです。ただ嘆き悲しむ、見送るということに終始するわけでして、家族葬から仏法の出会いというようなことが、なかなか無いのではないかというように思えてなりません。

次に２番目に申し上げたいことは、先ほど申しましたような、「白骨の章」が拝読されるような、従来、受け継がれてきた浄土真宗における葬儀についてであります。

ところで、葬儀ということについて、みなさんもお互いに認識されている言葉は、親鸞聖人の言葉であります「某、閉眼せば、賀茂河にいれて魚にあたふべし」ではないかと思います。どうもこの言葉だけが、突出して受け入れられているわけでありますが、これはみなさんも当然御存知の、覚如上人の『改邪鈔』に出てくるのでありますが、要するに、浄土往生の信心においてはその沙汰をせずに、単にその葬送の儀礼だけに終わっていく。こういうことでは意味が無いと言うようなことを仰るわけであります。このことを、もう少し推測してみますと、日本の歴史において、特に在家仏教でありますが、昔から僧侶がリーダーシップをとって、葬儀の段取りをして、色々と進めたということはあまり考えられないわけであります。だいたいは在家の方々、それも村の長老のような人達が采配をふるって、地域共同体の人々の協力のもとで、葬儀が組み立てられていく。そしてそこに僧侶が関わっていったのは、最初からか、かなり経ってからか、については、それはまた検討の余地がありますけれども、とにかく葬儀というものをすべて、僧侶が取り仕切ってきたわけじゃないということが、まず前提であります。

この「某、閉眼せば」とのお言葉からして、親鸞聖人も当然当時の葬送儀礼というのを目の当たりにしてらっしゃっていて、それに対しての、疑問というか、批判というお気持ちがあればこそ、「賀茂川に入れて魚にあたふべし」と仰ったのではないか、ともとれるわけであります。そういうことを考えましたときに、今私たちは、最初から最後まで、葬儀を組み立てていくというところにまで僧侶が関わったほうがいいのかどうか、この辺も１つ、これからの問題となってこようかと思います。なぜならば、先ほど申しましたけれども、地域共同体が特に都市化している地域において、崩れていっております。ですから、葬儀屋さんにすべてを任せるようになってきたことであろうと思います。さらに、宗教心が少しずつ少しずつ希薄化しているということも関係があろうと思います。

ところで最近のこのデータを見ますと、日本人が仏教に関心を持たなくなったようにとられる方々もあろうかと思いますが、私はこのデータの数字を見て、心強くしたわけであります。そのデータの結果は、約85％の方々が仏教に関心があり、そして、お寺についても、約30％の方がお寺にはやはり心が向くと示されているのですが、１番問題は、僧侶に対しての期待度が15％しかないということです。やはりこの僧侶それぞれの資質と申しますか、あり方というか、そういうところに今私たちを取り巻く批判の的がやはり強いのではないかと考えるわけであります。そういう中で、寺院と門徒との密接な、親密な関係、きめ細かな関わり方が近年は無くなってまいりまして、まさに、法事、葬儀、そういうようなことだけにおいて、お寺を訪ねるということになっていないでしょうか。お寺に足を向けるということについては、もちろん、年間を通じての大事な報恩講、永代経、各種の法要もありましょうけども、これはやはり参る人と参らない人とが二極化してきています。なかなか多くの人達が門徒であっても、なかなか参らないというような状況も、また問題であろうとも思います。

ここにいらっしゃる方々は、今から申しあげることを、果たして信じていただけるかどうかわかりませんが、私がまだ子供のとき、祖父が住職であったときですが、法事をなさるお家の当主が、時間になるとお寺まで住職を迎えに来られるのです。そしてそれを、前もって準備しております祖父が、法事で用います袈裟と衣と経典とを、風呂敷に包んで用意しておりますから、当主の方がそれを預かって先導してくださるわけです。ご門徒の家といっても、歩いて５分10分以内のところなんです。別にわざわざ迎えに来てもらわなくても自分の足で行けるんですけども、必ず受け継がれた伝統で、お迎えにまいりましたと来てくださっていた。これが、少しずつ無くなってきまして、今は私の門徒でたった一件しかありません。私は大阪ですが、富山から家ごと引っ越してみえた方が、おじいさん、おばあさんの代からそうするものだと教わってきましたということで、今80代の当主が、法事には必ずお迎えに見えます。他の家はみんな電話です。まだ来てもらえませんか、もう出てもらいましたか。坊守がまだ玄関にいるの

に、出ましたと。まるで寿司屋の出前と同じです。そういう感覚で、非常に事務的にお寺と門徒との関係が変わりつつあるのではないかと思います。

そして、今なぜ葬儀の費用が問題になるかと申しますと、これは、お葬式というものを非常に狭く考えて、葬儀式の部分だけをもってお葬式とお考えになって、それの費用、それのお布施だと考えられるところに、何故こんなに、とんでもない額を包まなければならないのかということになろうかと思いますが、本来はもっともっと、たくさんのことがお葬式に関わってあるわけであります。私たちのこの葬儀規範というものを見ますと、まず亡くなりますとご連絡がありまして、出かけていきまして、最初にいたしますのが臨終勤行です。枕経なんていう言葉が一般的ですが、亡くなった人にお経をあげるわけではございません。どこまでも、お仏壇の前でお勤めをさせていただくということです。そして、亡くなった方のご遺体を棺の中に納めるときの納棺勤行というお勤めがあり、そして、翌日の夜に通夜勤行があります。そしてさらにその翌日に葬儀式と言われております出棺勤行と葬場勤行と、さらに遺体を窯に入れて火をつけるときに、火屋勤行があります。そして、何時間かたって、(昔は翌日だったのですが)収骨勤行を行います。骨上げっていいますが、またさらにそれに関わって、家庭に持って帰ってこられてから、改めて還骨勤行を行い、そして初七日、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日、七七日のお勤めを行います。このすべてを包括したものをお葬式と考えます、単なる１時間だけのお布施ではないということです。こういうことを、私たちはもう一度、原点に戻って考えないといけないと思います。だから、このような時代になってきて、これはやめよう、これは合わせようということで、引き算ばかりしてきたんです。だから仏事の行いが少なくなってきたのに、お布施が上がってくるから、べらぼうに高くつくという受け止め方になってきたと思います。以前は、きめこまやかに僧侶が亡くなったお方の家庭に出向くということが当然あったのです。

すでにご存じであろうと思いますが、今日言われるグリーフケアになるんです。グリーフケアというのは、当然、大事な方が亡くなっていくということに関して、本人の苦しみは、もちろんでありますけど、それを取り巻く家族、そういう方々の悲しみについては、ただの１度や２度のご縁では、癒されることは無いわけであります。まさに私たちにおける仏教の本質は、一人一人の苦労に向き合う、そういうプロセスとして、先ほどからの色んな法要が行われていたのに、それをなんだかんだと言って、どんどん減らしていって、合わせていって、少なくしてきたと。そこに、これは誰の要請か、誰の要望か、これはまた検討しなければなりませんが、葬儀だけが突出してきているということになって、そこに問題が集約的に出てきているのではないかと思えるわけであります。具体的に申しますと、臨終勤行に呼ばれないことがこの頃、度々あります。お通夜のときに、最初に臨終勤行をやってくださいと、こういうわけです。

そこでかなりもう、出かける回数が減ります。ましてや、もっと多いのは、還骨勤行のときに、初七日を一緒にしてしまう。あれは変です。まだ初七日になっていないのに、初七日をやってくださいと。わざわざまた親戚が、家族が集まるのが大変だから、一緒にしてくださいと。きめ細かに家族が集まるということ、あるいは、親戚が集まるということが、当事者の悲しみを少しずつ少しずつ、癒していく営みであったのではないかと思わせていただきますと、そういうことが、考えていかなければならない問題であります。

あと、色々ありますが、だいたい言おうとすることは、今の中に込められておりますし、時間の関係もありますので、また後ほどの話し合いの中で申させていただきたいと思います。失礼いたしました。

〔司会〕

清岡先生、ありがとうございました。前半のプログラムをこれで終了致します。先生方、ありがとうございました。

〔司会〕

それでは、シンポジウムの後半の部分を進めて参りたいと思います。後半は最初に私どもの大学院生からパネリストの先生方に、それぞれ質問をしてもらいます。そしてそれぞれの質問に対してパネリストの先生方からお答えを頂く形式で始めたいと思います。

それではお願いします。

〔佐々木〕

実践真宗学二回生の佐々木と申します。現在は、恵まれた環境の下で研究しています。私はイオンの広原さんに質問させて頂きます。広原さんのお話にもありましたように、現在は地方から都会へと人口が移動していっていると思います。これに伴いまして、菩提寺と檀信徒や門信徒の関係と言ったものも、30年前くらいと比較すると大きく変化したと思います。また仮に近くに菩提寺があったとしても、お寺と深く関係をもっている方は少なくなっていると思います。こういった背景の下でイオンさんは、檀信徒、門信徒と菩提寺の関係に、介入する意図は毛頭ないとご指摘を受けましたけれども、檀信徒と関係の薄いお寺や僧侶にとっては、イオンさんのこうした新規事業は引き続き脅威になると思います。そこで私からご質問なのですが、今後700万人という団塊の世代の方々が旅立ちを迎える2040年頃に向けて、イオンさんの葬儀事業の見通しをお聞かせ下さい。

〔広原〕

ご質問ありがとうございます。今後、20年ということになりますと、非常に予測が難しいです。今、人口統計上言われておりますのが、昨年度亡くなられた方が114万人でこれが30年間増え続けると言われております。20年後という事になりますと、150万人くらいの人が亡くなられると考えられます。ビジネスの上で考えると、亡くなられる人が増える＝ビジネスが成長するとマーケティング上は読むのですが、葬儀の規模はどんどん小さくなっているのが事実であります。当然、収益的にも厳しいということになってくると思います。

これからどう変わっていくかということですが、一つは高齢化が進むごとに規模が小さくなるという問題については、歴史的に言いますと、葬儀は、昔は自宅で行われていて、それが変化して、現在は葬儀会館、会館葬というものが主流になってきています。最近になって、そういうものも使わない、小さなホールで行う家族葬、もしくは、直葬という形が増えつつあります。今後、これは益々増えてくると思います。例えば今の経済状況から言いましても、景気がよくなるというのは、人口減の日本の中では難しいと思います。企業はどんどん中国へ進出していき、われわれイオンも、国内での店舗の開店のペースを減らして中国で店を作っていこうと全体としては考える中で、ご自宅のリビングで行う葬儀のような、リビング葬というのが今後は復活するかもしれないと一つは考えています。

それから、もうひとつは無宗教葬というか、どんどん信仰心が薄れていくと、先ほどの講演の中にもありましたが、これに対してやはり心の依り所といいますか、このような側面はやはり宗教に期待するところが大きいのではないでしょうか。こういったものは葬儀の規模が小さくなっても、やはりご遺族の悲しみというのは同じだと思いますので、どのようにケアしていったらいいのか、亡くなったときだけというよりも、ご年配になられてそういうことが心配な方に対してどのようにお付き合いをしていくかということです。

それから最後に、自分がどんな葬儀をしたいのか、どんなふうに最期を迎えたいのかというニーズです。こういうのがこれからはどんどん出てくるように思います。これは海外では、アメリカやフランスではプレニードといいまして、事前にどこかの企業にお金を預けておく、もしくは宗教者にお金を預けておきます。それで、自分がもし亡くなった場合にはこのようにしてほしいということを契約しておきます。お金もすでに払っておいて、亡くなったらその通りにしてもらうシステムを、プレニード形式と言いますが、今後はこういう研究が必要だろうと思っていますし、今後20年のなかではそんなことが必要ではないかと思っています。決して、人数が増えるから将来が明るいとは見ておりません。特に今日のお話で高橋先生が仰ったお坊さんがお葬式を始めるということについては、これは別にお葬式で儲ける必要はないですね。われわれは事業をやっている以上赤字はだせませんので、やはり幾らかの収益をいただきたい

ということで考えますと、お坊さん自身が葬儀に参入して、利益なしでいい、お布施もあるし、トータルで考えたらいいということを始められますと、われわれにとっては一番の脅威になるかと思います。このことは今日初めて聞きましたので、今後検討していきたいと思います。

〔司会〕

ありがとうございました。それでは続いて三ヶ本さんよろしくお願いします。

〔三ヶ本〕

同じく、実践真宗学研究科二回生の三ヶ本と申します。私は、神宮寺の高橋卓志先生にご質問させていただきます。私自身も浄土真宗の寺院に生まれまして、子どもの時以来、寺院の葬儀というものを父の横で見てきたのですが、僕の目から見ても近年は特に変化してきているのではないかということをよく感じます。それでやはり先ほどのお話でありました通り、今回の３月11日の東日本大震災、あと先ほどの先生がお話になりました、団塊の世代の葬儀というものの変化は、さらに加速していくということは、私も同じように思います。それで、高橋先生の本『寺よ変われ』のなかで、葬儀が変われば寺が変わるというお話がありました。その葬儀が変われば寺が変わるということについて、ご質問させていただきたいのですが、葬儀、寺、そしてそこに関わる僧侶がどのように変わっていくべきか、というのは先ほどのお話の理想論、というわけではないですけれど、ゴールは見えているように思います。しかし、そのゴールに向けてどのようなことを具体的に寺院、僧侶はしていくべきであるのか、そして葬儀、そして僧侶が変わることによって、檀信徒や門信徒の方々や社会に対して、メリットといいますか、どのような影響が与えられるのか、という点についてお伺いできたらと思います。よろしくお願いします。

〔高橋〕

難しいご質問ですが、お坊さんには、それぞれキャラクターがありますね。今回の震災の現場に行った時もそうだったのですが、被災した人たちの中にすっと入っていくキャラクターを持っている人は結構たくさんいましたね。そして直接的に相手に寄り添っていくという特技みたいな、そういう人間性を持っているって人が結構います。そうかと思うと、そこに行くためにはハードルが高くて、どうしても乗り越えられない人も結構います。それがキャラクターだと思いますが、そういう中で均一化したお坊さんがあらわれる必要はないと私は思います。ですから、その場所、その土地、それからその世界の状況、社会の状況、こういったものにあったところを自分のセンサーでキャッチできて、葬儀に関して言えば、この葬儀はいったい誰の

ためにやるのか、その意味は何なのかということを、きちんと伝えられる人でないといけないと思います。いま、私は必死になってお葬式に取り組んでいます。命がけで取り組んでいるといった方がいいかもしれません。お葬式は、家族葬などで会葬の人数は少なくなってきてはいますが、不特定多数の方が葬儀会場には集まります。その人たちに「教え」を伝える絶好の機会が葬儀だととらえたいのです。そんな絶好の場を逃す手はないだろうと考えています。ですから私の場合、亡くなった方の祭壇に向いている時間と、会葬している人たちの方に向いている時間というのは、葬儀の中で半分半分です。葬儀の中の儀式それぞれが何を意味するのかということを、遺族や会葬者にきちっと説明するからです。簡単に言えば授戒。お戒名をお授けする授戒とはなんだ。授戒の時にはいったい何が必要なのか。たとえば、授戒の際に「懺悔文」「三帰戒」というお経を読むのですが、「懺悔文」「三帰戒」を映像で会葬者に見てもらいながら、これはどういう意味があって、どうしてそれをやらなきゃいけないのかということを簡略に説明するようにしています。そこがひとつの宗教的な儀式をわかっていただく原点であるように思います。それからもう一つは、『おくりびと』という映画がありました。あれは青木新門氏の原作ですが、『納棺夫日記』がイメージとなって作られたものです。その中で、私の大好きな俳優さんで二年前に亡くなった山田辰夫さんが、若い妻を亡くすシーンがあります。そして子供もまだ小さいのです。そこへ本木雅弘さんが納棺夫となって行くわけです。山崎努さんと一緒にです。喪家への到着が五分遅れるんですね。そうすると玄関先に居た喪主の山田辰夫さんがヒステリックにこう言うんです。「何時だと思ってんだ。五分過ぎてんだぞ、五分。あんたらなめてんだろう。死んだ人間だから待たせてもいいと思ってんだろう」と。そのあと「死んだ人間を食い物にして金を稼いでいるくせに」と言うんです。「死んだ人間を食い物にして金を稼いでいるくせに」。ここのところに私はズシンと来ました。私もやっぱり小さいときに「お前のとこは人が死んだら儲かっていいな」って言われ続けたんです。そのなかでそれを転換し、「人が死んだら儲かる」っていうところに焦点を当てるのではなく、亡くなった人と葬儀を通してどんなふうにして関係を作っていくかという意識転換にものすごく時間がかかりました。それをクリアできた時に、初めて葬儀っていうものの意味が分かってきたような気がします。そして青木氏は、その著書の中でこういっておられます。「職業に貴賤（尊いとか賤しいとかというもの）はない、いくらそう思っても死そのものをタブー視する現実がある限り、納棺夫や火葬夫は無残である」と。「無残」って言葉を使っているのです。納棺夫や火葬夫、プラスお坊さんです。青木氏は無残だという。じゃあ、なぜ無残なのか。無残に至る致命的な問題というのを青木氏は指摘しています。それは「死というものと常に向かい合っていながら、死から目をそらして仕事をしている」というのです。私達は、坊さんとして、死から目をそらすこともできるのです。1時間程度のお経を読みさえすれば、葬祭上では、それでい

いと言います。でもそうではありません。その人の生・老・病・死全てに一貫してお坊さんとして関っていくということが大切だと思います。死から目をそらさずに向き合うとは、どういうことかを真剣に考えたいのです。ここが現代の仏教による葬儀に欠如しているのです。いま、仏教がクリアしていかなければならない重要な問題だと思います。それが変わった時に葬儀が変わっていくと思いますし、葬儀が変わるにはお坊さんが変わっていかねばなりません。私自身も大転換の、つまり自分にとっての発心の時期というのがありました。その発心があって初めて葬儀にも目が向いて、社会にも目が向きました。

〔司会〕

それでは、もう一方、藤田さんから質問してもらいましょう。

〔藤田〕

二回生の藤田と申します。清岡先生に質問させて頂きたく思います。現在、引き算の結果、大変コンパクトな葬儀となっているというお話がありました。それを受けて、遺族のグリーフケアという点から、かつてのようなより綿密な葬儀を改めて考えていく必要性もあると思いました。しかし、現在、実際に行われている簡素化、或いは、省略されている葬儀において、僧侶が行えるグリーフケアというものが、具体的にどのようなものがあるのか、お考えでしょうか。もしあれば教えて頂きたいと思います。

〔清岡〕

だいたい通常の葬儀の時間は1時間です。葬儀の時間は、1時間ですが、皆さんご存知の通り、葬儀社との前もっての打ち合わせで、だいたい40分くらいでお経は終わって欲しいと言われます。後は最後のお別れや出棺の準備がありますので、1時間まるまる使ってもらっては困るという打ち合わせがあります。ですから皆さんがお焼香に出向かれれる時に、35分過ぎて行くとすでに片付けているケースがあります。葬儀はすでに決まった形のものになっていますが、葬儀規範が宗門・本願寺で決められたということは、逆に言うと昔は、地域によってバラバラだったということなのです。ですから、これを決められたから身動きがつかなくなったと言うのではなく、まだまだ考える余地があるのです。それをまず私は、喪主になられる方と、いろいろ事前に打ち合わせをして、何かご要望はないですか、と聞きます。お経を読まないということはありません。お経も非常にグリーフケアになります。お経を読まなくなったら、駄目だと思います。しかし、お経だけで終わっては、どうにもなりません。まずもって、お経に重ねるように読み上げられる雑音が邪魔なんです。お焼香順を麗々しく読み上げる。あれは悲しみ

にひたろうとする人の心を破り捨てる。それでお焼香順が先だとか、後だとかで終わってからもめます。だからそういうのをすると、葬儀の雰囲気がますます悪くなると私は思っています。それでその中に何を入れるかということですが、特定の方ですけど、具体的な例として「決まりきった弔辞は結構です。お坊さんでもパターン化した弔辞をもってらっしゃるでしょう。それを読んだだけでは、ちっとも気持ちが伝わらないので、限られた時間の中でご法話をして下さい。」というリクエストがありましたので、ご法話をいたしました。これは全体の葬儀時間が限られていますから、せいぜい５分程度です。弔辞を読み上げられる程の時間です。５分を最も有効にするために、その直前に色々と事情聴取をしておかないと駄目です。ですから極端な話、全く見ず知らずの方が、お葬式を依頼して見えた場合は戸惑います。今私の住んでいる地域も、どんどん人口が増えてますから、突然、葬儀の依頼に来られる方があります。そういう方のお葬式をさせて頂くというときに、とても気を使うというか、困ることがあります。はっきり言いいますと、何度も足を運んで、いろいろお話を聞かせて貰わないといけないということです。そうでないと、その遺族の方に寄り添うようなご法話になりません。それは、浄土真宗の教義を話せと言ったら話します。しかし、教義を話すだけで遺族の方々が癒されますか。もっと何か、深くその人の心にしみるようなことをお話しようと思いますと、やはり味わいが大事なのです。その味わいの背景には、亡くなった方とか、残された遺族の方についての情報をしっかり持っていないとだめで、何度も足を運ぶということが大事だろうと思っています。私も法話の中で、近年、お葬式がどんどん削られてきたと言いました。だからその削ってきた分だけ僧侶との関係が現実に薄まってきていますので、その分を何かプラスで取り返さないといけないということを思っております。

それから具体的に私の場合は、必ずお寺にお礼参りに来て頂きます。そして、その時にお骨をお持ちいただきます。これは地域によって遠い地域の方は無理かもしれませんが、お骨を拾ってそのまま自分の家に帰らないで、まずお寺に来ていただく。そこでお参りをしてお話をさせて頂く。こちらから出向くことと、お寺に来ていただくことをなるべく数を多く持つことによって、少しでもグリーフケアになって頂けたらと思うのです。現実に、先ほど申しましたが、核家族、地域社会の崩壊で、昔だったら色んな人が出入りして、具体的に遺族に寄り添って、傍にいたりお話を聞いておあげになっていました。この頃は、そういう悲しみに打ち沈んでいるところには、行かない方がいいんだ、避けた方がいいんだ、というような意識が広がってますから、ますますお葬式を出されたお家の方々は孤独化してるのです。そういう中で、私たちはいろいろなお参りという意味合いの大義名分もありますから、それを単なるお経をあげて、さっさと帰るのではなくて、すこしでも傍に寄り添ってあげる、お話を聞いてあげる、そういう面でのことを私はなるべく心がけております。以上です。

〔司会〕

ありがとうございました。院生の方から質問して頂きましたが、会場の皆さんから、それぞれの先生方に質問用紙が行ってますので、それをいくつか拾って頂いて、お答えいただければと思います。広原先生からお願いいたします。

〔広原〕

たくさん質問頂きましてありがとうございます。何点か読み上げたいと思います。

いくつか分類をしまして、一つはご自分がお坊さん、ご住職でいらっしゃるというのを３通ほど頂いております。

「私は住職をしています。うちの寺では本当に一円の布施でも本当にしっかりと丁寧にお参りさせて頂いております。ぜひとも、布施の金額を固定化するという暴挙はやめて頂いて、僧侶にもいろいろな人がおられますので、ぜひとも僧侶イコールぼったくりという視点で見るのではなくて、幅で見て頂きたいです。」というご意見。それから一方「お話の中で、布施が少ないという僧侶がいて、不満の声をあげられているというお話をお聞きしました。確かにそのような僧侶も現実にはいると思いますが、自分がやった葬儀の中で、タダ同然で行ったケースや、布施袋に一円も入れずに渡してくる、というケースもありました。イオンとしてはこのようなケースにどう対応されますか」というようなご意見。それから「葬儀での僧侶の振る舞いで、これだけはやめて欲しいというのがあれば教えて下さい。」というようなご質問を頂いております。

「布施の金額を固定化するような暴挙」と仰っていますが、この問題は以前から議論をさせて頂いておりまして、本来はお布施っていうのは布施者の方の気持ちで出すのが一番だと思います。もちろん檀家で菩提寺のある場合は、長年のお付き合いの中で決まってくるものだと思います。ただ最近は、菩提寺を持たない方が増えているという現実の中では、普段お付き合いが無いわけですから、何らかの目安というか、どれくらい払ったら気持ちが表せるのか、というのをお坊さんの側から教えてあげる、これぐらいが適切っていうことは明示すべきではないでしょうか。そうするとお布施袋の中に一円も入っていないということも無くなるのではないかと思います。菩提寺があっても無くてもお坊さんにとっては、お気持ちを金額で表して頂く、という話がありましたが、本当に尊敬すべき僧侶でありましたら、お客さんは自動的に入れてくれるのではないかという話をいたしました。ビジネスの世界でも、イオンのバイヤーが取引先、仕入先に対して、できるだけ安く買いたいということで「これだけ買ってるんだから安くしてよ。」といくら言っても、安くなったところで取引先はどう思うでしょうか。これは「イオンに取られた」と思ってしまうのです。同じお金を出すにしても、この商品を世の中

にこれだけ広く伝えれば、世の中がこんなに便利になって、こうなるのだということを説明して、是非、協力して頂きたいと話をすれば、同じ取引先が安くするにしても、お金の出し方は全然違ったものになってくると思うのです。つまり葬儀に初めて出られた方でも、そうでなくて、お付き合いが長い方であっても、やっぱり葬儀に僧侶が来られるっていうことが、清岡先生の仰る、本当にグリーフワークで大事なことだと思います。残された遺族の心を癒す大事な役割があると思います。そういう方に、分からない方には仏教の教えをきちんとご説明頂いて、我々にも分かる言葉で教えて下さる僧侶がいたとしたら、決められた額を出したとしても納得いくでしょうし、また檀家であれば自分の出来る限りのことはしたいと思われるのではないでしょうか。これが一番大事なことではないかと思っています。

「親がすでに互助会に入っているがイオンに乗り換える事は可能か」というご質問です。当然これは可能でございます。互助会というのは、互助の精神で非常に良くできたシステムです。お香典というシステムもそうなのですが、お互い様というか、お互いに助け合って葬儀とか、結婚式等の儀式を行うシステム、そのものは素晴らしいと思うのですけど、互助会で積み立てたお金だけで全て葬儀がまかなえるか、というと、現実的にはそうでない場合が多いので、退会ということは当然できます。また経済産業省の各出先でもそういう相談の窓口がありますので是非相談なさってください。イオンがいいということではなくて、お客様にお勧めしているのは、まず一番大切なことは、誰かが亡くなってから考えるのではなくて、人間とは必ず最後にはお亡くなりになるのですから、事前に考えておく必要があるのではないか、とお伝えをしております。そして、事前に考えて、例えば二社以上の葬儀社の見積もりをとって、相見積もりを取るというようなこと、そういうことが大切かと思います。中身も、どんな葬儀が自分はしたいのか、どんな葬儀をしてくれるのかも、きちんと確認されたほうがいいかと思います。大概失敗したと仰る方は、病院で亡くなってからお考えになって、もう時間が無い中で決めるので、失敗につながるという場合が多いように思います。

あと、直葬を否定するような表現がありましたけれども、これは直葬をすると儲からないからと聞こえるという質問もいただきました。当然ビジネスですので、赤字でやるわけではありません。いくらかの報酬はいただいておりますけれども、これは時代のニーズからいって、直葬の火葬を、ご家族だけでされたいという要望も最近はすごく増えております。これに対応して、我々の方も、メニューは準備させていただきました。儲かるとか、儲からないとか関係なく、お客様のニーズにどこまでも応えていきたい、という想いでさせていただいております。

〔司会〕

ありがとうございました。高橋先生の方にも沢山の質問がまいっているかと思います。

どうぞ、お願いいたします。

〔高橋〕

私が葬儀について話をするとすごく挑発的に聞こえるらしく、非常に多くの批判めいた質問が来ます。今回もそうでした。その中で、自分のお寺の葬儀のPRに聞こえましたというものがありました。私のお寺は松本市にあります。京都まで来てPRする必要はまったくありません。なぜPRに聞こえるかというと、神宮寺のようなシステムで動かしている寺が無いからです。無いからこそPRに聞こえてしまう。日本全国の寺がそのような形でやっていったなら、恐らく葬儀の費用は三分の一、四分の一になり、そうなるとイオンさんが成り立たなくなります。しかし、絶対にそうはなりません。なぜなら、お坊さん達は、手間をかける仕事が嫌だからです。今のままの葬儀屋さんのプログラムに乗って「葬儀時間を四十分以内にしてください」と言われて、その通りにやっていく、ということになっているのではないでしょうか。でもそういうことではなく、例えば、執り行う葬式の一番大事なところは何なのだろう、何のためにこの葬儀に皆集まってきたのだろう、ということを、葬儀屋さんではなく坊さんたちがしっかりと考えなければいけない。そう考えたときに、一人ひとりのオリジナルお葬式というものが必要になってきます。2010年度の神宮寺葬儀を見てみると、48件の葬儀があったわけですが、うちの檀家さんの葬儀が23件で、あと25件が檀家以外の方の葬儀でした。檀家以外の方というのは神宮寺の葬儀に何らかの魅力を感じておいでになった方ばかりです。しかし古くからの檀家さんではないので、情報は多くありません。しかし、この亡くなった方がどういう人生を歩んだかという取材に時間をしっかりとかけるのです。そしてその方の生前のお写真をお借りしたり、あるいは肉声をテープで聞いたりということを、葬儀の組み立てのため、かなり時間をかけてやっていきます。その中から、この方の戒名の文字を選ぶ、あるいは引導の法語をつくるための重要な情報になるのです。それが一つひとつのオリジナル化につながっていくということになります。このご質問に関していえば、日本全国のお寺が本気になってやっていく、誰のためにやっていくのかといえば、亡くなっていく人のため、自分の檀家さんのためと考えていけばいいのではないかと思います。とは言っても、ほとんどの場合そのようにはならないから、イオンさんは安心していただいていいと思いますが…。

〔広原〕

これは冗談なのですが、私は高橋先生のお話を聞いて、本当に本気でお坊さんが葬儀そのものも全部やるということになれば、それが一番いいのではないかと思います。それが一番安くなる方法なので、葬儀会社が介在しなくて、お坊さんが自分の本堂をお使いになって、もちろ

んいつでもあるわけですから特別にお金を取ることも無いでしょうし、読経も自分でやるというように、全て自分でされたらいいのではないかと思います。なぜ高橋先生はされていて、他のお坊さんには広がらないのかな、と思うのですが、これはなぜなのでしょうか。

〔高橋〕

それはたぶん、そのようなことをするのがめんどうくさいからです。なぜなら、先程清岡先生がおっしゃいましたが、お坊さんは衣を他の人に運んでもらうという、一つの権威があるわけで、権威の中にあるお坊さんが「棺は私が頼んでおきますので」とか、「料理も全て手配しますから」とはなかなか言えないです。上から目線になってしまうということです。実はこれは、お坊さんが手配を全部するということではなくて、坊守さんやお寺のスタッフ、あるいは喪家の人達がやっていく仕事もなかにはあるのです。たとえば、役所への手続きや、お花の手配ということを喪家自身が行うことで、それをやっているうちに「あっ、お父さんは死んだんだな」ということを認識して、少しずつ自分自身のなかに積み上がってくることになっていきます。そのようなことを神宮寺では進めています。

〔広原〕

一般の、お金を出される方が一番低料金でできるシステムというものを、皆で考えていかなければならないと思います。そのなかで、誰がどのような役割をするかということなので、本当にお坊さんがそれらの役割をされるのであれば、それに対して我々が物品を供給する仕事に切り替えないといけないと思うのです。

〔高橋〕

もしもそうなったときはよろしくお願いします。でも、本当にそういうことなのです。衣を鞄に詰めて葬儀場に行き、一時間程度のお経を読む。自分の寺は一切準備することはない。せっかくお寺の本堂があって、広い敷地があるのにもったいないのではないか、と私は思っています。だからそれを使うということは、大事なことだと思っています。これに関係したご質問のなかにどこの寺院も葬儀会社とお付き合いがあると思うのですが、その関係を絶つのは可能なのでしょうか、というご質問があります。それは、関係を絶つということではなくて、必要な部分は葬儀屋さんに関ってもらうというやり方をしていくといいなと思います。そして、自坊でそのような葬儀を全て行うことは、多くの寺院で行われるのでしょうかという、質問も来ているのですが、これはなかなか難しいことです。そのシステムを神宮寺で作るのには二十年かかりました。その二十年の紆余曲折のなかで、今のような形ができあがったということで

あります。一朝一夕にできたというものでもないわけです。それから、もうひとつは、団塊世代が言う葬式はいらないという理由は何かという質問についてですが、私は、「葬式は、要らない」ではなく団塊世代は「葬式、にお坊さんは、要らない」と言っていると書いたつもりです。団塊世代は、おそらく、さっき申し上げた、島田氏のおっしゃっている３つのことにシンパシーを感じているからです。たとえば、「千の風になって」のヒット。この「千の風になって」は、深い意味で、アニミズムの世界に入っています。そのアニミズムの世界と浄土宗系で言われる還相回向がオーバーラップするのです。しかし団塊世代は「千の風になって」から伝統仏教に頼らない死生観を感じ取っています。私自身が団塊世代ですから、そのような気持ちがわかりそうな気がします。伝統仏教に頼らない死生観というのが、直葬へつながっていっている可能性もあります。これは短絡的かもしれませんが、その一部に確実にあると思います。２つ目の島田氏ご自身の「葬式はいらない」という著書の大ヒットですけれども、この大ヒットは、伝統仏教への見切り感が表れています。そのなかで島田氏は「お前たち（お坊さんたち）勝手にやれよ、でも、もういらないから」と……そういう感じで書いていますね。それはもう、寺離れっていうところに直結し、そのことに同調する人は多い。３つ目のイオンさんの葬祭業の進出に関しては、伝統仏教の代わりとして、流通の専門業者であるイオンさんが葬儀を取り仕切ることになります。これは、流通関係というイオンさんの専門分野が全国の関連する葬儀屋さんをリードするというプロフェッショナルの仕事です。私はいつも問題にし、若いお坊さんや学生さんたちに言っているのは、「お坊さんというのは、何のプロか」ということです。お坊さんのプロフェッション、お坊さんとは何をする人なのかということ。この質問をお坊さんにすると、答えられないんです。「葬式をやることかな」、「でも葬儀屋さんとは違うな」と言うんです。じゃあ「お経をあげること？」と問うと、「それもあるけども、でもそれがプロと言えるかどうか？」という人たちもいます。お朝事をやらないお坊さんはいっぱいいます。そんな中で、マーケッティング・流通のプロで、多くの人々の目に具体的に葬儀を見せること、その合理性を示すことができるイオンさんが動き始めたのです。葬祭の分野に異分野のプロが動き始めたということです。それは、私たちが、見送られた方々や見送った方々のニーズを取り込めないうちに、そしてその方たちが何を考えているかを、私たちがきっちり反映できないうちに動き出した現象・事実です。それからもうひとつは、私たちが檀家さんを見る目と、イオンさんがお客様を見る目というのは明らかに違うということもひとつあります。イオンさんは、おそらく、コンシューマー＝消費者として、2000万人近いカード会員さん、あるいは、ほかの多くの視野をもった方々に焦点を当てています。それは、消費者として焦点を当てている。私たちのお寺の関係者は、檀家さんをスポンサーと考えている。宗教における消費者とは、一切考えていない。スポンサーと考え、そして寄付を募るというような、あるい

は、お布施をいただく。そのように感じます。ここは大きな違い。このような状況の中で、葬儀におけるイオン化の流れというのは、私は絶対止まらないと思います。ますます進化していく。イオンさんの独自性を発揮した、人々のニーズに応える葬儀がどんどん提示されていますから、ニーズに耐えられない寺に対して、寺離れが起きることは否めないと私は思います。それと対抗できる葬式を行っていかないと葬儀は確実に寺から離れます。私たちが真剣に葬儀にかかわっていかなければならない時期なのです。今のままだとおそらく、千の風、それから葬式はいらない、こういう感覚は、団塊世代は大好きですから、これらを大好きな人たちが、イオンさんを支持していくとなったときに、どんどん寺離れは加速していくだろうと思っています。

最後にもうひとつだけ言わせてください。先程、清岡先生のグリーフケアのお話がありまして、そのお話の中で、大変に驚いたことなのですが、「教義で遺族の方が癒されますかね」というお話がありました。そこのところは根源的なことではないかと思うのですが、またいつか時間がありましたら教えていただきたいと思います。

〔司会〕

ありがとうございました。それでは清岡先生、フロアからの質問を含めまして、お答えいただきたいと思います。

〔清岡〕

僧侶も葬儀会社もお葬式をしない方が良いとしたら、誰がお葬式を進めていくのか。誰が主体となって進める葬儀が現実の問題としてよいか、という質問についてお答えします。

葬儀の変遷について少しお話をいたします。私と同じ年代の方はご存知かと思いますが、昭和30年代頃にようやく復興が目に見えて明らかになってきて、高度経済成長という言葉が叫ばれ始めるようになってきました。この頃からお葬式が大きく変わってきました。まずは、亡くなる場所が変わりました。それまでは圧倒的に自分の家で亡くなることが多かったです。やがて家屋の構造が変わってきました。そして、地縁社会が核家族化で、崩壊をしていきます。それまでは同行葬と言いまして、皆同じ地域に住んでいる者同士が力を出し合って、葬儀を執り行なっていました。もちろん基本的にはお金をかけることができない、お金を出せないという時代背景もありました。ところが、今言いました大きな時代の変化があり、経済成長のなか、所得も増えてきたという実感がともなうなかで、葬儀会社が、大変増えてきました。この同行葬というものは、大変に素晴らしいシステムではあるけれども、相互扶助ですから手伝っていただいたことに関して、手伝いの返しをしなければならない。そのことが徐々に煩わしくなっ

てきて、金銭で済ませたほうが簡単だという実感が出てきたために、昭和40年代に入ると、一気に葬儀会社に依頼をするといったお葬式の形態が顕著になってきたのです。

まずはじめに考えられることは、そのような形でここまで来たのですから元に戻すということは難しいかと思います。しかし、浄土真宗の門徒組織ということで考えますと、有力な門徒の役員の方、具体的に言えば総代をされている方々が、まずご法義を身に付けていただいた上で、旗振り役をその方々がしていただく。全てを葬儀会社にまかせるのではなく、住職と相談をしながら遺族の気持ちを受け入れて、画一的なお葬式ではなく、オリジナルなお葬式の形態もあっても良いのではないか、と漠然とではありますが考えています。

それから、続いて、今、世の中が変わってヒューマニズムの宗教が求められており、仏教である必要性が失われているように私は思いました。それは率直な御意見をいただいたのですが、ヒューマニズムの宗教というのは、私の理解では道徳的・倫理的宗教と読み替えてもいいのではないのかという上で、お話させていただきます。確かに今、世間で広がっている宗教の中には、宗教そのものよりも道徳性・倫理性を表に立てた宗教がかなりあるように思います。ですが、本質的に深めていくと溝があるので、道徳・倫理から宗教には入っていけないのです。やはりどうしても宗教の宗教たる本質は親鸞聖人のお言葉で言えば、「生死いづべき道」です。結局、人間同士がいくらいたわりあっても、個人としての老病死の問題はまったくお手上げの状態であり、解決できないのです。それを抜け出るというところに、私たちの念仏の教えというものがあることをお示しいただくので、「念仏のみぞまことにて」という、その上にたってこの社会をお互いに、共感しあいながら生きていく、そこにまた新たな倫理性・道徳性が、おのずから報謝行とか報恩行となって、当然広がっていくべきだと思います。私が最初に申しあげました、今必ずしも統計上、日本人は仏教を見限ったということではないのです。まだまだ仏教に対して、関心はあるのです。ただそれを十分に生かしきっていないお寺、そして僧侶、そこに私たちは厳しく問い直しをしていかなければならないと思ったわけであります。そして今、高橋先生が最後に仰っていただいたことは、ちょっと誤解が生じる可能性があるのでもう一度重ねて申しますが、教義だけをお葬式の場で説いてもなかなか伝わらないということは、逆に言えば、お葬式だけでもって、なかなか教義は広められないということです。だから、そこにある程度の、情感的感覚を私たちの生活の歴史に置いてきた面があるではないでしょうか。親鸞聖人も当然、親しい方々の死に対して無関心ではおられなかったのですが、お葬式の場に出られてお説教なさったのかということについては、なんら私たちに示唆をしてくれるものはないのです。後々のフォローというかケアは、いろいろなお手紙などお言葉を通して伺うことができるのですが、それを教科書どおりにしゃべるだけでは、なかなかケアになっていかないのです。だから繰り返し、お話を継続していくなかで少しずつ少しずつ、浄土真宗の教えその

ものに触れていっていただきたいのです。悲しみは時間が経過することによってある面では薄れていきます。薄まっていく程に教えが頂けてくるというのが、私はこのお葬式をご縁にして、という一番大事なところではなかろうかと思います。ですから最も残念なのは、亡くなった当座だけお念仏が出ているけれども、時間が経つほどにお念仏が出なくなってしまう。そういう方々が今まで私たちの周りにいらっしゃったわけです。

それがご縁となって、一気に一度も参らなかったお寺に、参いられるようになったという尊い方もいらっしゃいます。しかし、亡くなった当座だけのお念仏という方々も、無きにしもあらずと思います。そのことを考えながら、私たちのこれからのお葬式を通しての伝道ということも考えていかなければならないと思っています。

〔司会〕

ありがとうございました。先生方が大変上手に時間を守っていただきまして、終わりの時間になってまいりました。

今日は葬儀をテーマにいたしました。死に直結するテーマであります。私共がこうやって葬儀について「ああでもない」「こうでもない」と言ってるのは、幸せなことなのかもしれません。死の有様は3.11の震災のような有様もありますし、あるいはその後、仮設住宅に住みながら、私はいつまでも足手まといになってはならないと、自ら命を絶つ人さえあったと聞いています。したがって、葬儀も様々な形、様々な状況の中で、行われる葬儀があり得るわけです。

そのことも忘れてはならないのですが、質問の中にもありましたが、仏教の伝統として浄土真宗では法名・他宗派では戒名などは必ず必要なのでしょうか。俗名でいいのではないのでしょうか、というご質問がありましたけれども、キリスト教は俗名のままの名前が墓に刻んであるように、そのままです。恐らく洗礼名はあるのでしょうが、そのままだと思います。それから東・西本願寺は毎日のように、仏教の名前を頂いて、仏教徒として生きてください、ということが行われています。

そこで質問なのですが、高橋先生、臨済宗では生前の戒名というのは行っているのでしょうか。

〔高橋〕

基本は生前戒名です。ですから受戒というものを生前に終えて、そこで管長さまやトップの方に戒名を頂くといったことが基本です。

〔司会〕

ありがとうございました。少なくとも葬儀というのは、自分が自分の葬儀をすることはできません。私どもは死ぬまで生きてますから、生きてる間に自分の死を経験することはないわけです。そしたらいつ経験するかというと、やっぱり愛するものや、親しいものと別れた時に、自分の死も経験しておかなければならないのです。そして親であろうと子であろうと、一緒に死んでくれませんから、たった一人で往かねばなりません。手ぶらで往かねばなりません。生前に立派な事をしようがすまいが、人から褒められようが褒められなかろうが、たった一人で終わっていくのが私共でありまして、それゆえ、実は生きている間に真剣に葬儀に関っておくべきではないでしょうか。

そして、死ぬというのは一体どういうことなのか、死ぬ前はどうなるのか、死んだ後はどうなるのかということを、哲学的にあるいは宗教的に深めたい、高めたいというきっかけが葬儀であろうかと思います。

人が死ぬ話ではありません。自分が死ぬ話でありますから先程の高橋先生でありましたように、死から目を背けずに関っていこうではありませんか。というのが願いであります。
今日こうして参加してくださった皆さんは、目を背けずに参加してくださったということを感謝しております。

今日はようこそ貴重な時間を、シンポジウムのためにお使いくださいましてありがとうございました。

以上で、「葬儀の今を考える」～あなたはどう見送り、どう見送られますか～と題してのシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。